

インターナショナルへの夢の実現へ

鈴木 豊彦 博士



鈴木豊彦先生は同じ春日井市に生まれ、同じ高校に通った2年後輩にあたる。

鈴木先生は名古屋大学に進み学問を続け、その道筋は国鉄中央線で春日井駅から千種駅を利用していた。私は建築設備会社に勤め、やはり現場に行くのに千種駅を経由していた。

当時、長身の鈴木先生とその後奥様になる、やはり春日井に住む小林君子さんと一緒に姿をプラットフォーム上で見かけることしばしばであった。

たぐいまれなる美しさで帽子が似合う小林さんと、長身のお二人が並んで立つと、プラットフォームのそこだけは花が咲いたように見え、折々に私も会話する機会を得、心和む一時を共にできた。その後、鈴木先生は名古屋大学助手生活から、プリンストン大学大学院での学生生活へ学を究めるため、奥様同伴でアメリカ生活を選択されていた。

同じ頃、私は三機工業に在職しながら、名古屋工業大学大学院を修了し、アメリカに渡ることを考えていた。私のアメリカの第一歩は、鈴木先生夫妻のニューアーク空港での出迎えで始まった。ニューアーク空港はニュージャージー州に位置し、プリンストン大学から、かぶと虫のフォルクスワーゲンで空港まで出迎えに来ていただき、マンハッタンへのドライブが最初のアメリカ生活体験となった。当時、鈴木先生はプリンストン大学の既婚者用学生寮に住んでいて、私は一度大学を訪れたが、案内されたところは閑静な町並みで、多くの学者先生、博士先生の住宅が並んであり、キャンパス内には飛行場があった。

その後一年してニューヨーク大学大学院に移られ、ドクターとなり就職に際し「グラマン社」やヨーロッパの大学への話もあったが、日本の鳥取大学に落ちつかった。

先生の言葉では、鳥取の気候も外国に似ていると選択されたと聞いた。

印象深い思い出はご夫妻の運転で出かけたボストン郊外のタングルウッド音楽祭である。その後3度訪れることになるが、75周年記念の音楽祭は、最初の開催と全く同じ曲目のプログラムであった。小澤征爾の名の小澤ホールでは、今の若い人の演奏に出会える。

日本人にとっては、親しみを覚える場所が、先生と過ごした時間に戻してくれる。

鳥取大学は砂漠研究所を持ち、世界中から学者たちが共同研究のため、テーマを持って訪れるインターナショナルな大学で、現在でも海外留学生数とその国数は日本で一番多い。

鈴木先生は航空機エンジンの研究が専門で、当社バスがアメリカのノーウォーク病院の日本製自家発電機（2000KVA）の損傷の訴訟で、AKF社の仲介で、アメリカ側の弁護士事務所から原因判定を委託された。アメリカ側から、病院、USタービン社、保守会社夫々の関係者が立ち合い、1週間の現地での検証がなされ、最終報告書となった。明石市での工場での検証に立会って全てのレポート作成も先生に力に依ったが、他でも、国際的な舞台で仕事をする際には、鈴木先生の力がいつも必要で、快く引き受けて頂いていた。

その後、口腔の病気で顔面手術をされたが回復され、引き続きPESの切り札としての存在で、我々の力になっていただいていた。

2005年愛知万博のイベントに於ける、出身国での地球環境問題を取り上げた「鳥取大学外国人学生によるプレゼンテーション」の鳥取大学の留学生との交流は、鈴木先生の助言支援なくしては実現されていなかった。

PES社員と、1200mの高さのドバイプロジェクトの学習の為に訪問した、台北101を見学の折、鈴木先生と台北に同行できたことで格別な親しさが当社全員に記憶に残った。その後、鈴木先生が指導を受けたニューヨーク大学の教授からの紹介で、台南の蔡先生に知り合うことができ、台湾の学問、環境政策にも通じる縁となっている。